

第5節 蘭島を中心とする有田川中流域に残存する民家の特性

(1) 茅葺民家の地理的分布

1966年より国の国庫補助事業として全国各地の代表的な民家のリストの作成が行われた。(和歌山県文化財学術調査報告書第4書「和歌山県の民家」)これは古い民家を調査し、民家の発展の歴史をさぐるとともに、優れた古民家を探し出し、これを文化財として長く後世に伝えることを目的としていた。調査対象となった民家は169件であり、貴志川流域沿いの旧海草郡野上町・美里町は14件、有田川流域沿いの旧有田郡清水町は9件、旧伊都郡花園村は1件であった。当調査により貴志川流域沿いと有田川流域との民家は、共通の特徴を備え小規模で古い形式を残したものが多くことが明確化された。

それらの対象となったものはほぼ50年以上経過した農家であり、現代の集落景観において歴史的文化的持続性を担う空間的固有性を担ったものとなっている。そのほとんどは茅葺き民家として、腐朽に耐えて各集落の歴史と文化の継承を体現していた。

しかし和歌山県においては、これらの伝統的家屋は急激にその姿を消しつつある状態となっている。この実態と地域的差異を捉えるべく和歌山大学本多・平田建築設計ゼミでは2007年以降継続的に和歌山県全域の民家において、環境条件や産業、文化と民家の外観要素の関係などについて観察を行ってきた。

此处では特に2007、2008年に収集した11,436枚の採集写真資料及び2011、2012年の実測調査等をもとに、有田川の上・中流域に残存する民家の景観要素としての位置づけについて検討する。調査方法は調査地域で50年以上前に建てられたと思われる民家を撮影し、GPSの位置情報をもとにして、Google Earthを用いて外観要素の分布図を作成した。(参考資料 2007年度修士論文 小椋崇弘「外観からみた紀南民家の地域制とその分布に関する研究」、2008年度修士論文 中村将之「和歌山県における民家の地域性とその分布に関する研究 - 外観要素に着目して -」)これにより外観調査を行った集落数は752箇所となっている(図5-25)。

これらのうち茅葺き屋根の民家を分布図(図5-26)に表わすと、茅葺き屋根は有田川中流域、生石高原南西部から、花園村、高野山、葛城町から紀の川北部に連なる周辺に固まって分布していることが明らかになった。

外観調査を行った752集落中、茅葺き屋根の民家が確認されたのは86集落である。その86集



図 5-25 外観調査を行った集落の分布図

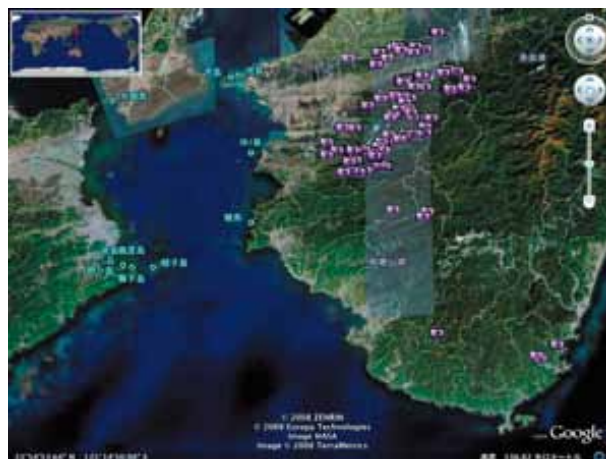


図 5-26 茅葺き屋根の分布図

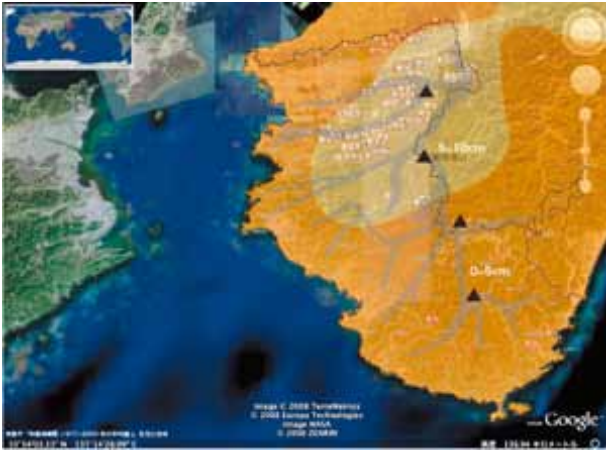


図 5-27 茅葺きと年最深積雪量と山系の分布



図 5-28 雪止めの分布

落中、38 集落が有田川流域の清水、花園、紀美野であり、割合は 44% を占めている。これは外観調査で確認された茅葺き屋根の民家の約半数が当地域に集中していることを示している。

【山系及び降雪の影響と家屋形態の相関性】

分布図はその中でも清水地区での茅葺き屋根の民家が圧倒的に多く、有田郡から北の山間部に集中していることを示している。また、これに年最深積雪と山系のデータを重ねてみると、和歌山県のなかでも積雪が多い地域ほど、茅葺き屋根が多く分布している（図 5-27）。これはヒアリングによると、茅葺き屋根の急勾配を維持することで、屋根に積もった雪を落としやすくするためでもあると言われており、気象条件と茅葺き屋根の分布が相関性を見せている。

一方雪対策のもう一つの特徴となっている屋根の付属物「雪止め」の分布が同様の傾向を示し、雪対策が重要な課題となっていることが表裏の関係性として示されている（図 5-28）。

なおここで茅葺き民家と呼んでいるものは、茅葺きの上からトタン板（亜鉛めっき鋼板）を張っている「トタン板張り茅葺き民家」と、トタン板を張っていない原形のままの「トタン板無し茅葺き民家」も同じシルエットを保つ形態として総称して呼んでいる（写真 5-26・5-27）。

しかし現在では自然素材である茅の上からトタンを張った民家（以下、「トタン張り茅葺き民家」）が大半であり、トタンを張っていない茅葺き民家（以下、「トタン無し茅葺き民家」）は僅かである。これは私達が通称茅葺き民家として認識している田園風景のほとんどが鉄板張り屋根のシルエットを指しており、それでもなお歴史的景観の重要な要素とみなされていることを示している。

【茅葺き屋根減少の背景】

和歌山県における茅葺きは、基本に入母屋造りであり、材料は主にススキを用い、雨漏りや一部老朽化した部分に対しては、刺し茅として稲わらや麦わらを用いて補修されている。茅葺き屋根は、林業の参入・発展による茅場（和歌山県では、他に「茅場町」、「茅バヤシ」、「茅刈り場」などと呼ばれていた。）減少の影響を受け、茅を葺ける人の高齢化もあいまって技術の伝承が困難となっている。現在でも茅葺きが見られる紀北山間部や紀中山間北部でも、茅葺き職人の存在や広大な茅場の有無によってその存続が大きく左右されていると考えられる。

職人については紀州屋根屋と呼ばれる茅葺き職人集団の存在が代表的で、橋本市柱本地区に拠点を置き、和歌山県内だけでなく紀伊半島の諸県や兵庫県東部、大阪府、京都などにも出稼ぎをしており、60～80 年前には、90 人もの職人が存在していたという。

しかし、現役の紀州屋根屋の職人は 2008 年時点で 2 人しか残っておらず（内 1 人は、退職後



図 5-29 トタン張茅葺民家の分布



図 5-30 トタン無し茅葺民家の分布



写真 5-26 茅葺民家



写真 5-27 トタン張茅葺民家

職人として手伝っている。)和歌山県全域を見ても5人程度で、若くて70歳くらいであり、跡継ぎもなく、今後茅葺屋根は急激に減少していくことが必定となっている。

「茅場」に関しては、数地域が共同で使用していた生石山の存在が大きく影響している。茅葺き民家でも、「トタン張茅葺民家」が大半であると述べたが、生石山周辺においては、今もなお「トタン無し茅葺民家」が見られる。

紀北山間部や紀中山間北部の茅場の減少は、戦中戦後の木材の価格高騰により大きく影響を受けた。茅場や田畑には杉が植えられ、屋根素材としての茅の生産は減少し、その結果茅葺屋根の上に鉄板が張られるようになり、いわゆる「トタン張茅葺民家」が増えていった。

現在では茅葺民家が見られる地域は、和歌山県内でも標高が高く、降水量が少なくかつ積雪の多いところとなっている。これは茅葺屋根の特徴である急勾配の屋根が、上からトタンをかぶせられることにより、老朽化の延命策として雪を落としやすい利点が保たれ、結果的に屋根形態の希少性が保たれていると言える。

現在でも茅葺民家の見られる地域では、ハナレは元杉皮葺きを由来とする形跡を持つ付属屋が散見される。また上流域のように林業が隆盛になった時期に比べ植林化が小規模だったことが、農村風景としての茅葺とその他の屋根の形が混在する中流域農村集落の残存に寄与していたと考えられる。その中でひととき高いトタン板が被せられたシルエットは、往年の姿を繋ぎとめる現代の農山村景観の特徴として、点在することによって面的な景観の特徴を印象付けている。

(2) その他の伝統的屋根素材

1) 元杉皮葺屋根の分布

比較的勾配の緩いトタンを用いた屋根の大半は、以前杉皮葺きであり、「トタンを上から張った杉皮葺き」（以下、「トタン張杉皮葺き」）と「トタン葺き」がある。実際にトタンの下地や野地として杉皮が見られることから、その名残を確認することができる。（ただし「トタン張り杉皮葺き」と「トタン葺き」は、一見見分けがつかず、区別することが非常に困難であり、ここではこの両者をまとめて「トタン屋根」とする。）

また紀南山間部において、昭和 30 年頃までの林業が好調であった時代の景観は杉皮葺きの屋根によって特徴づけられていた。しかし、林業の衰退と変化（杉皮を剥ぐことが少なくなった。）から杉皮の入手が困難になり、トタン板といった工業製品が普及し始めると、「トタン張り杉皮葺き」や「トタン葺き」の民家が現れ、現在に至っている。また「トタンを張っていない杉皮葺き」（以下、「トタン無し杉皮葺き」）の民家は、極めて僅か（付属屋や庇部分のみとして、3軒確認している。）に見られるにすぎない。

「トタン屋根」（「トタン葺き」と「トタン張杉皮葺き」）の分布を見てみると、「本瓦葺き」の分布と重ならないことが分かる。トタンが普及する前は、「杉皮葺き」であった場合が多いことから、人工林率の分布と重ねてみると、人工林率 55% 以上に「トタン屋根」が分布している事が分かる。なお沿岸部ではほとんど見られないのは、塩害も関係しているとも考えられる（図 7・8）。

2) 本瓦葺屋根の分布

本瓦葺きの見られる日高平野を中心とした地域において、千森によると明治時代中頃には、茅葺きから瓦葺きに変化していき、大正時代初期には、瓦葺きが普及していったことが述べられている。この地域に本瓦葺きが多い理由の 1 つは、海からの風が影響していたのではないかとと思われる。本瓦は重く、他の屋根材よりも飛ばされにくいからであろう。また、標高の高く気温の低い山間部では、低温焼成の瓦だと凍結して割れやすいために、杉皮やトタンが屋根材として採用されていると考えられる。瓦の明確な産地やルートは不詳だが、おそらくこの本瓦の見られる地域では、紀州灘の海運の拠点として、近世から廻船業が大きく栄えていたことが関係しているのではないかとと思われる、有田川中流域の民家の屋根素材としてはあまり採用されなかったことが推察される（図 5-33）。



図 5-31 トタン屋根の分布



図 5-32 トタン屋根と人工林率野分布



図 5-33 本瓦葺きの分布

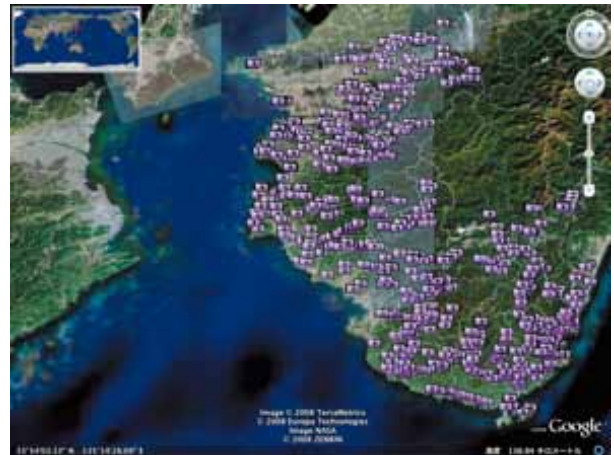


図 5-34 桧瓦葺きの分布

3) 桧瓦葺き屋根の分布

悉皆調査の結果では、和歌山県内のほとんどの地域で桧瓦葺きが観察されている。日高平野を中心とした沿岸部では、本瓦葺きが、山間部では波板トタン（亜鉛メッキ鋼板）葺きが、山間部でも紀北や紀中北部では、茅葺きが観察された。しかし、ヒアリングによると昔は、どの地域にも茅葺きが多かったという。文化8年（1811）に出版された紀伊国名所図会にもかなりの家屋が茅葺きだったことを示唆しており、江戸時代においてはそれが一般的な家屋形式だったことがうかがわれる。

現在では清水地区においても全国的に工業化が進んだ昭和30年代以降に建てられたと思われる住居の多くには、軒先に雪止めをもった桧瓦が葺かれている。しかしこれは和歌山県全域に広く分布しているため、地域の特徴を差異的に示すものとは言い切れず、むしろ集落景観の背景となって存在しているといえる（図 5-34）。

（3）屋敷構え

茅葺民家は住まいと同時に農業生産の拠点でもあり、単独で建っていることはほとんどなく、前面に作業用のニワをもち、分棟形式の小さなコンパウンドを形成している。付属屋としては納屋、蔵、作業場、風呂、便所などが適宜配置され、直接主屋に連結されているものもあった。

三田集落、小峠集落、西原集落、湯子川集落においては立地条件の違いにともない取水方法や生活利水方法が、谷川水、湧水、地下水、河川水などそれぞれ異なることが明らかとなったが、これに伴い主屋の方位設定が左右されていた様子が見受けられる。つまり取水の上手に水まわりを設け、下手側にニワをもち山を背負い谷川に開く構成がとられ、南面するとは限らない。栗生の谷村邸の事例では主屋は北面しており、谷川に開くことが優先されている。

敷地の狭小な中山間地域においては、このような敷地条件に適応しやすい間取り形式が定着していたことが推察され、小規模な二間取り、三間取りが土間を介して配置の自由度を獲得する傾向にあったと考えられる。

付属屋は屋根勾配三寸前後の比較的緩い勾配を持ち、杉皮葺きであった痕跡を残すものも散見される。清水町誌に掲載されている古写真などによると、これら付属屋も茅葺きであったものが多く見られるが、修理や増改築を繰り返すうちに、簡便な構法に変化してきたことがうかがえる。上流域高野山方面に遡ると、元茅葺きの屋根が昭和中期頃までに屋根勾配を変えて矩勾配から3

寸勾配程度の緩い勾配に置き換えられ、杉板やトタン板あるいは波型鉄板に葺き替えられた事例が沢山存在している。

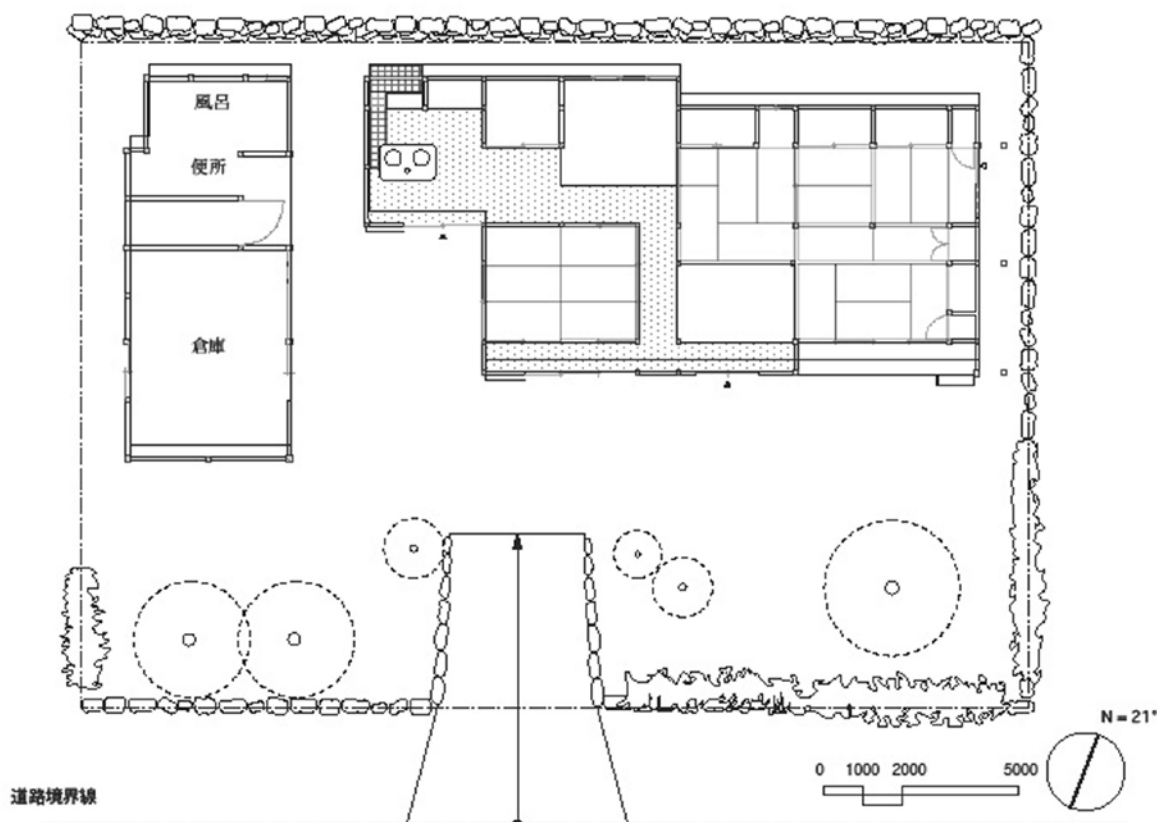
この結果江戸時代から昭和中期に至るまで、各地の集落景観は時代の変遷とともに様相を一変させ続けてきたことが明らかとなっている。このような状況を背景とし、そそり立つように建つ茅葺屋根は、農業に立脚した生活の存在を表象する空間的造形として、地域景観の重要な要素となっている。しかし今日ではそれらも希少なものとなっており、地域の歴史的継続性を今に残す貴重な民家として、主な事例を以下に取り上げる。

【主屋の空間構成】

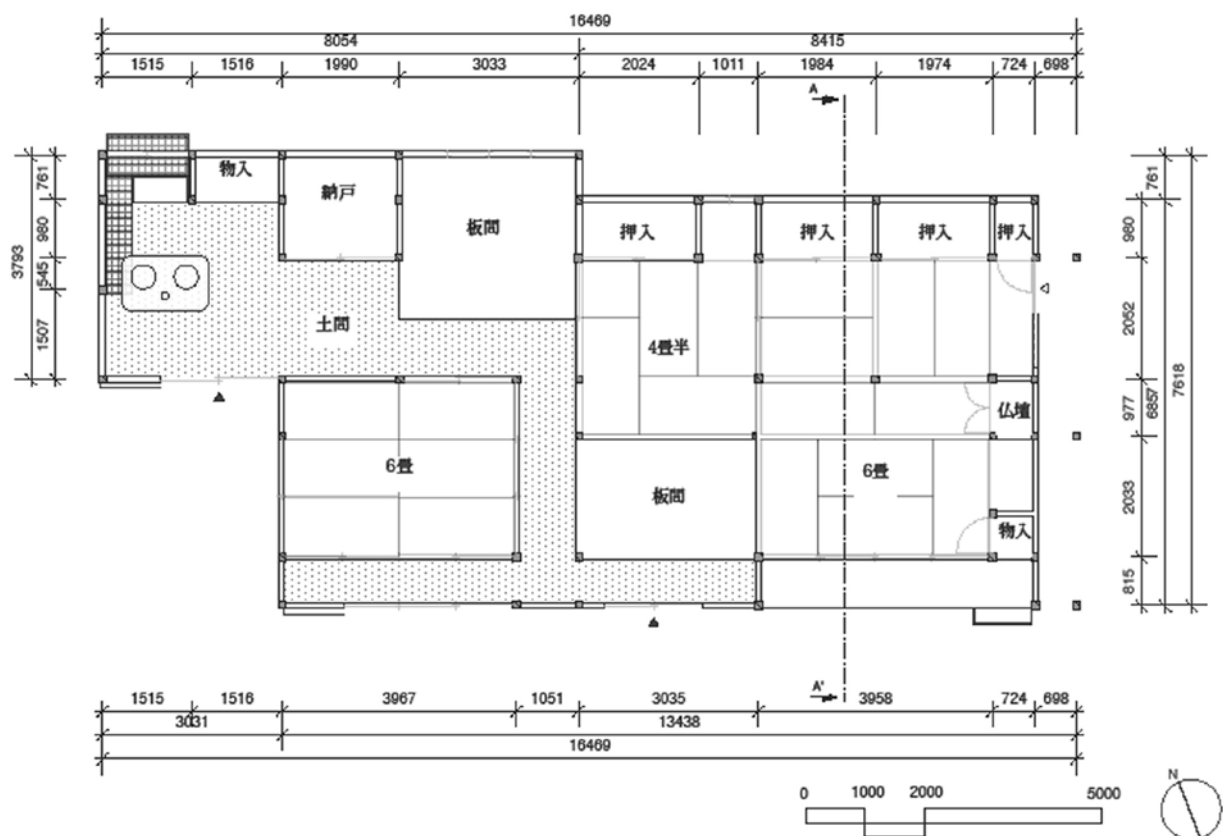
実測調査を行った三田集落の西林邸、小峠集落の笠松邸は共に地域的な特徴としての間取り形式が、紀伊風土記の丘に移築復元された清水町栗生の谷村邸の三間取り、日高群中津村の小早川邸の二間取りに通底し、千森が指摘した紀中山間型の地域にも一致している。

その原形は谷村邸によく現れており、ニワに面して仏壇のあるオモテをもち、その奥に小さなナンド、側面に板間のダイドコが連結したいわゆる三間取りとなり、全体の片側に、土間が設けられることを原形として成立していたことがうかがわれる。

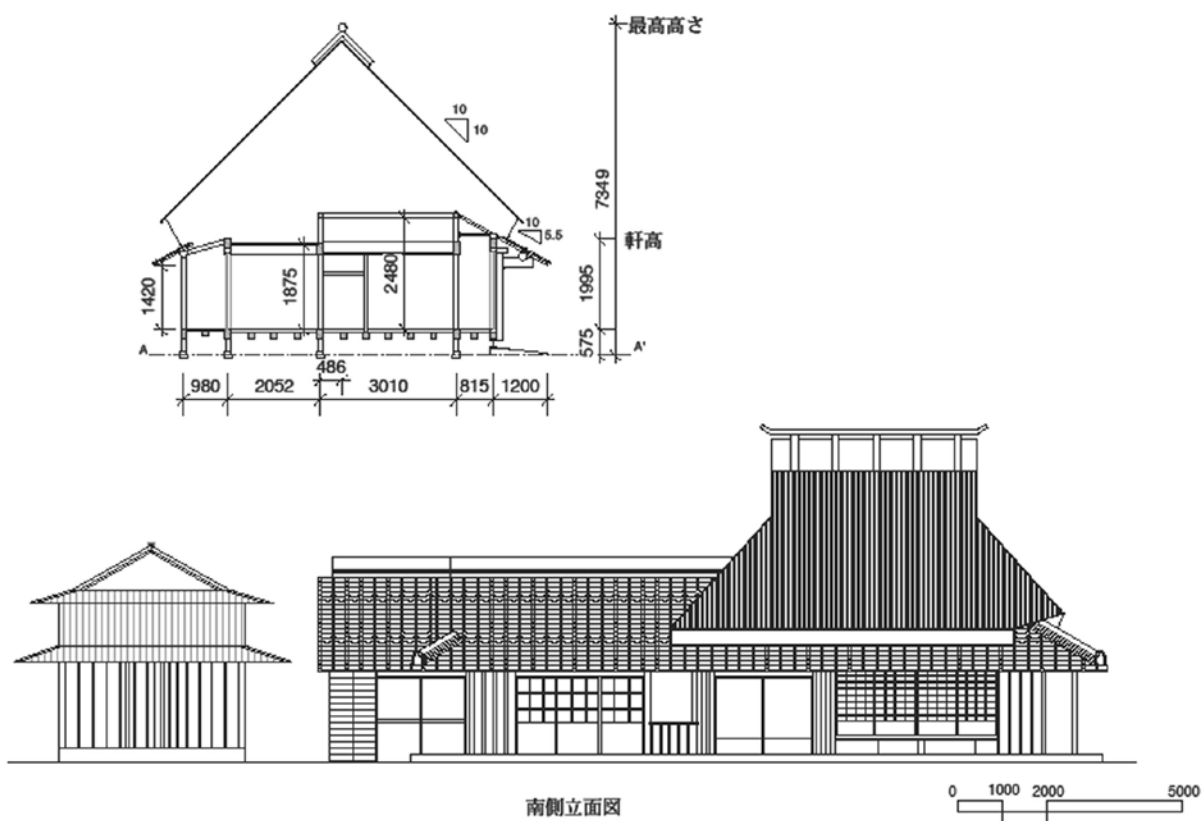
【西林邸（三田集落）】 正面に向かって右手半分、梁間 6,800 × 桁行 7,800 の部分に茅葺き屋根が残されており、主屋であったことが明らかとなっている。これは四間取りの形式に見えるが、こ



資料 5-1-1 西林邸（三田集落）配置図



平面図



資料 5-1-2 西林邸 (三田集落) 平面図・断面図・立面図



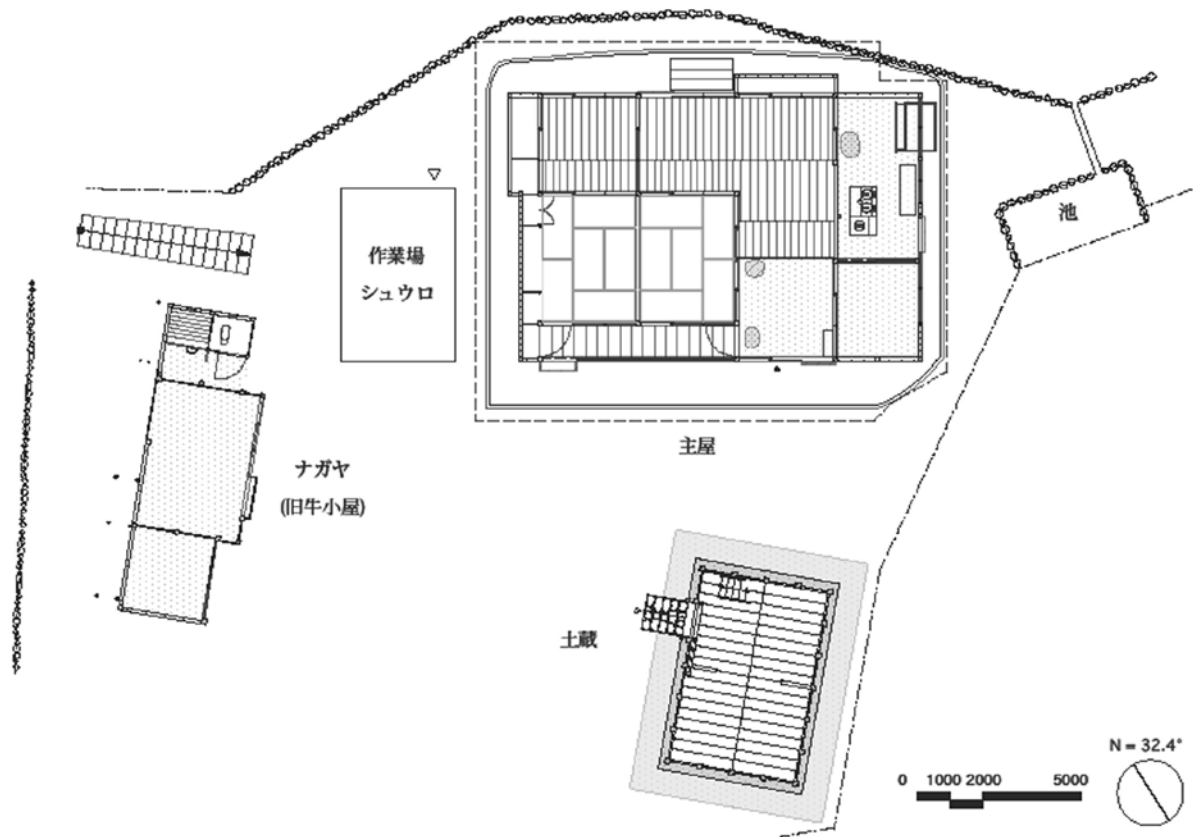
資料 5-1-3 西林邸（三田集落）

の主屋が単独に存在していたことを想像すると、右手半分がオモテとナンドの関係になり、左半分前列は土間が床上げされたことを伺わせる。またその後列は土間であったと推察され、確定する証左は得られていないが、規模から見ると小早川邸のように二間取りであった可能性も捨てがたい。建物全体としての左半分は瓦葺きとなっており、後年増築されたと言われているがその年代は明らかでない。この増築にあたっては主屋の柱に貫の切断痕が残されており、当初から付属屋（おそらくカマヤ）が存在していたことを示している。

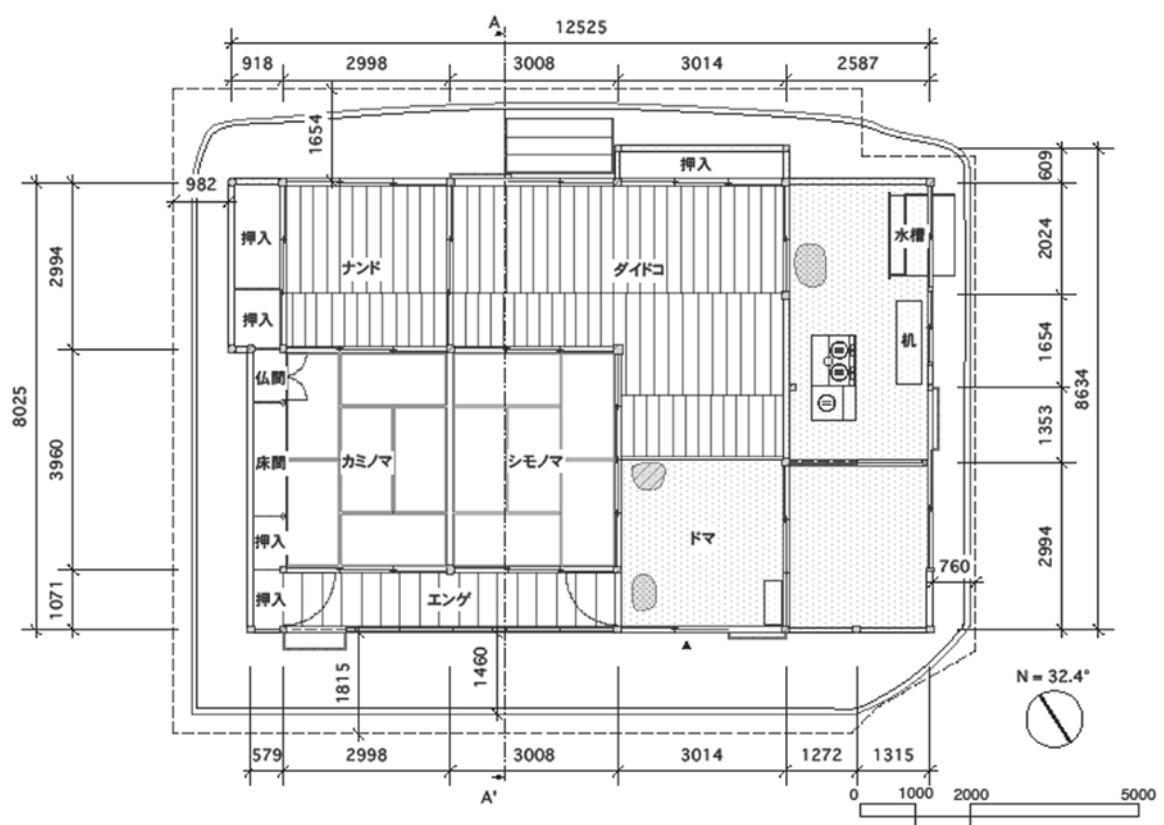
【笠松邸（小峠集落） 村の有力者の住居として、比較的大きな規模を有しており、オモテとツギノマを前列に配している。現在ではそれぞれカミノマ、シモノマと呼んでいるようだ。縁も比較的幅広く造られ、カミノマには仏壇と床の間が一間半にわたりとられている。

奥の後列にはナンドがとられ、ゆったりとした三間取り平面となっている。後列にはナンドに連結してダイドコが大きくとられL字型に前列の土間まで張り出している。この板床は後年張り直されているが、ダイドコの中央床下部には大きな囲炉裏又はクドの跡が残されており、ダイドコであったことは間違いない。しかしL時型の張り出し部分が当初どこまで延びていたかは定かでない。オモテから土間に入った右手には幅約 2.6 m の部屋が一行「通り土間」のように確保されている。この幅の半分は茅葺き屋根の庇の部分にあたり、残りの半分には下屋が架けられており、細長い作業場として増築されたことを物語っている。

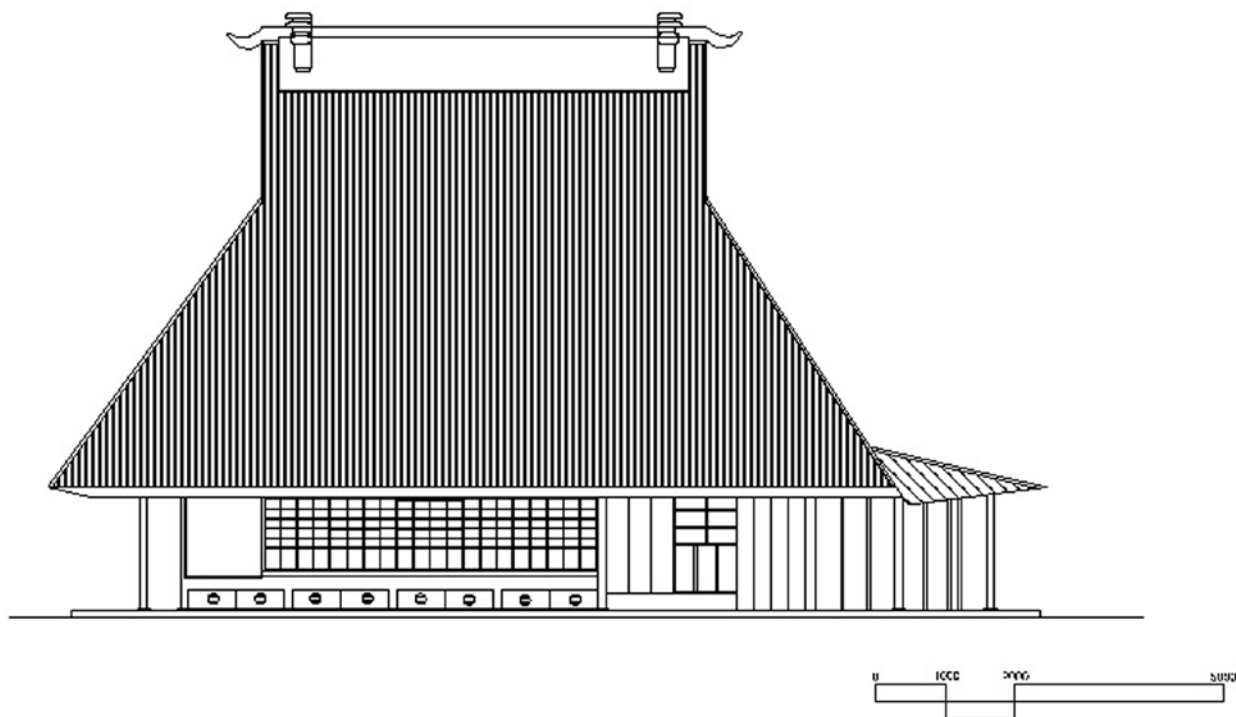
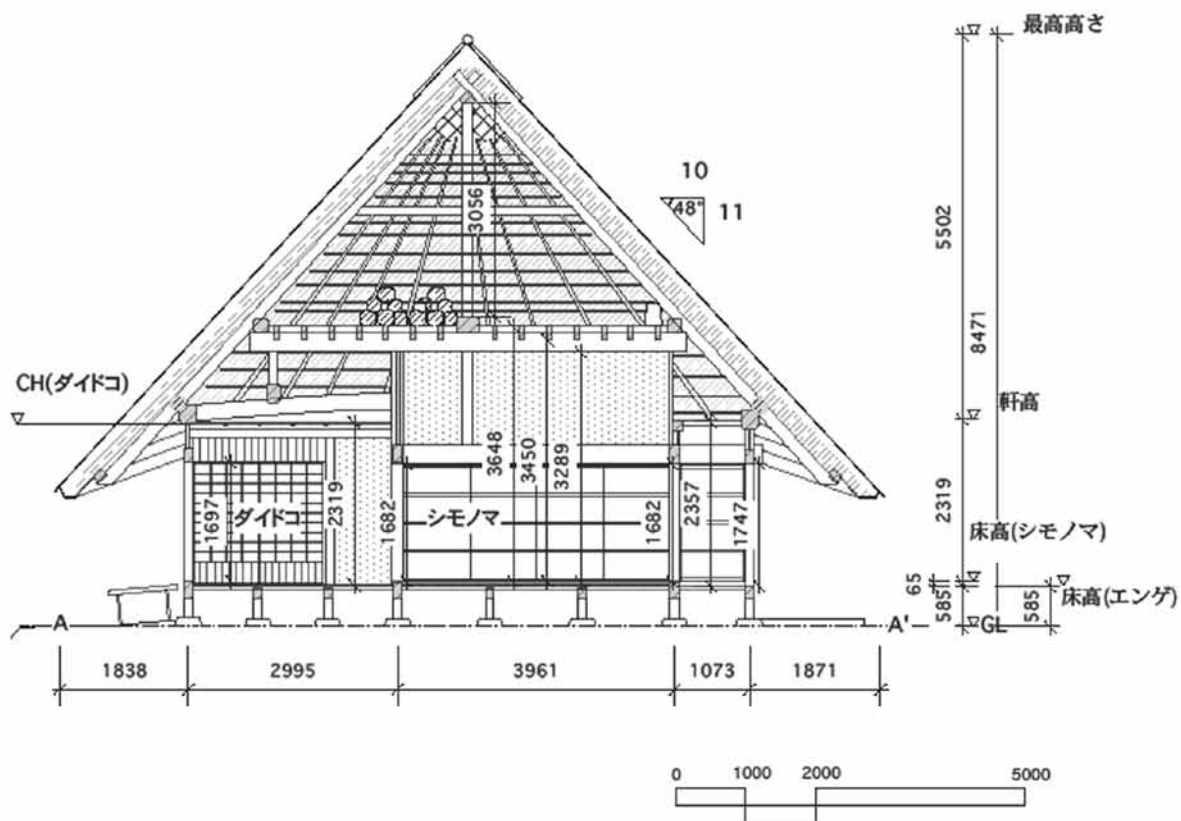
これはかつて保田紙を漉いていた作業場の名残であり、水槽には谷水を直接引き込んでいた様子を示す痕跡となっている。



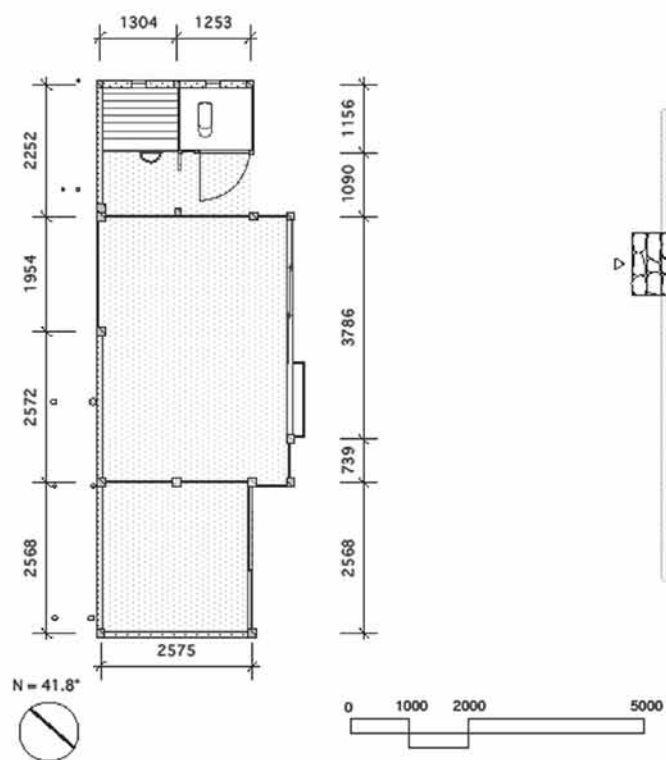
配置図



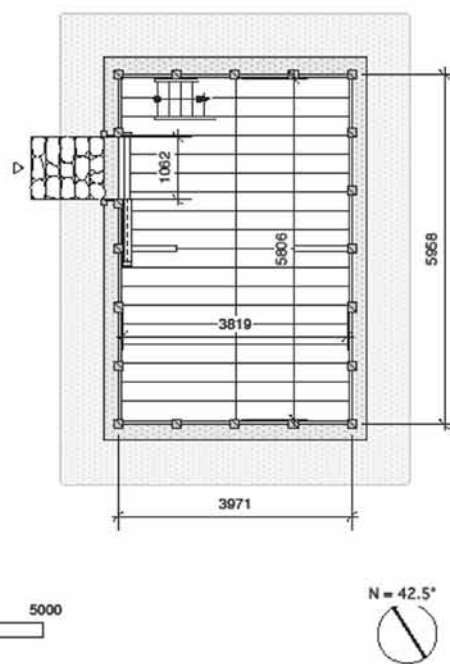
資料 5-2-1 笠松邸 (小峠集落)



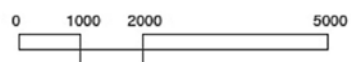
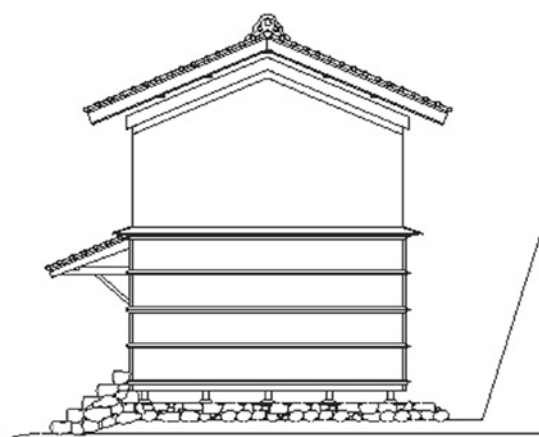
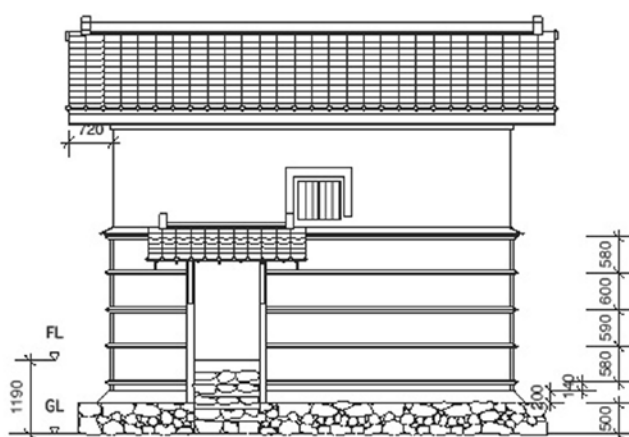
資料 5-2-2 笠松邸 (小峠集落)



附属屋倉庫平面図

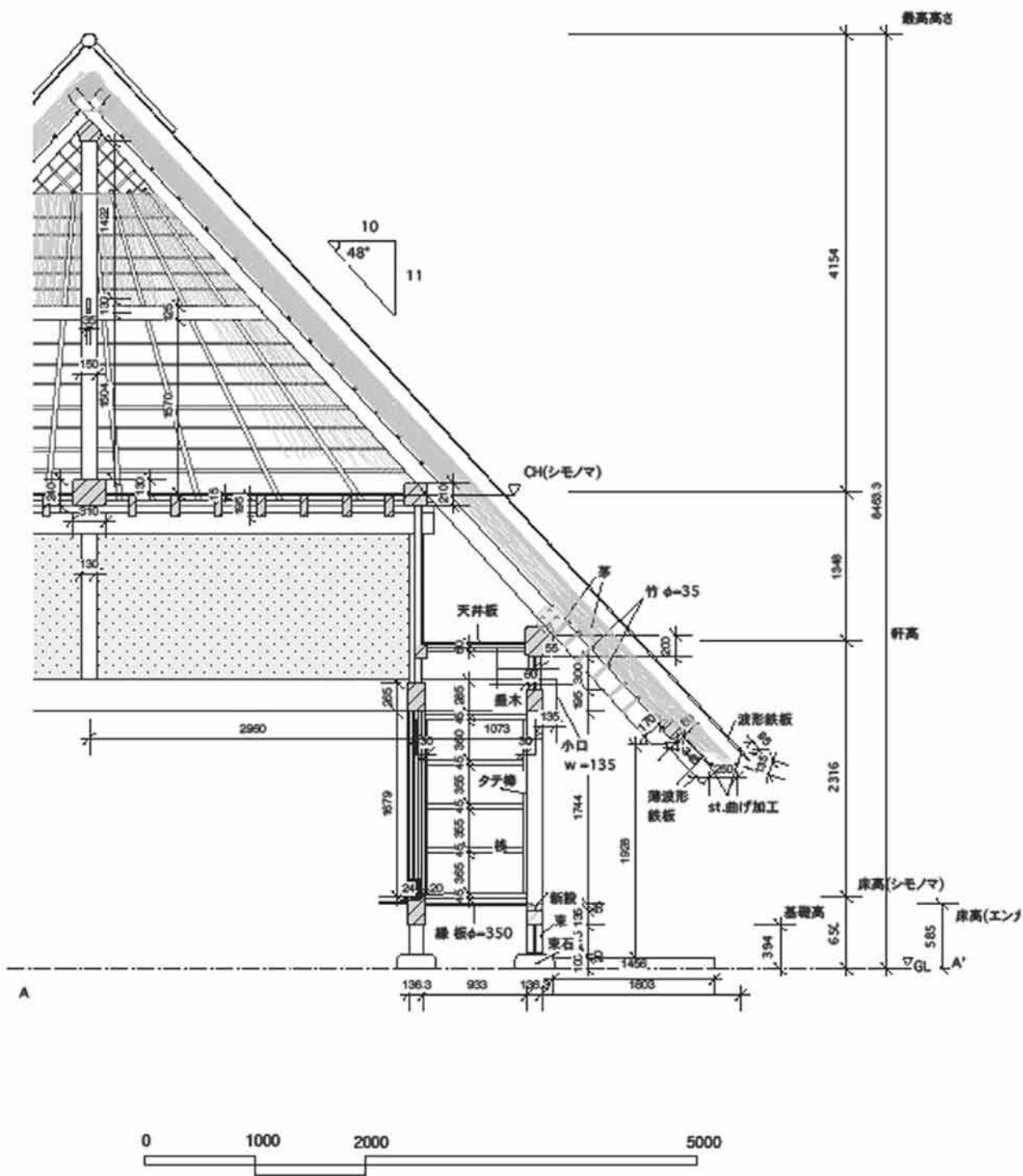


土蔵平面図



土蔵立面図

資料 5-2-3 笠松邸（小峠集落）蔵と倉庫（旧牛小屋）



矩計図

資料 5-2-4 笠松邸（小峠集落）



資料 5-2-5 笠松邸（小峠集落）

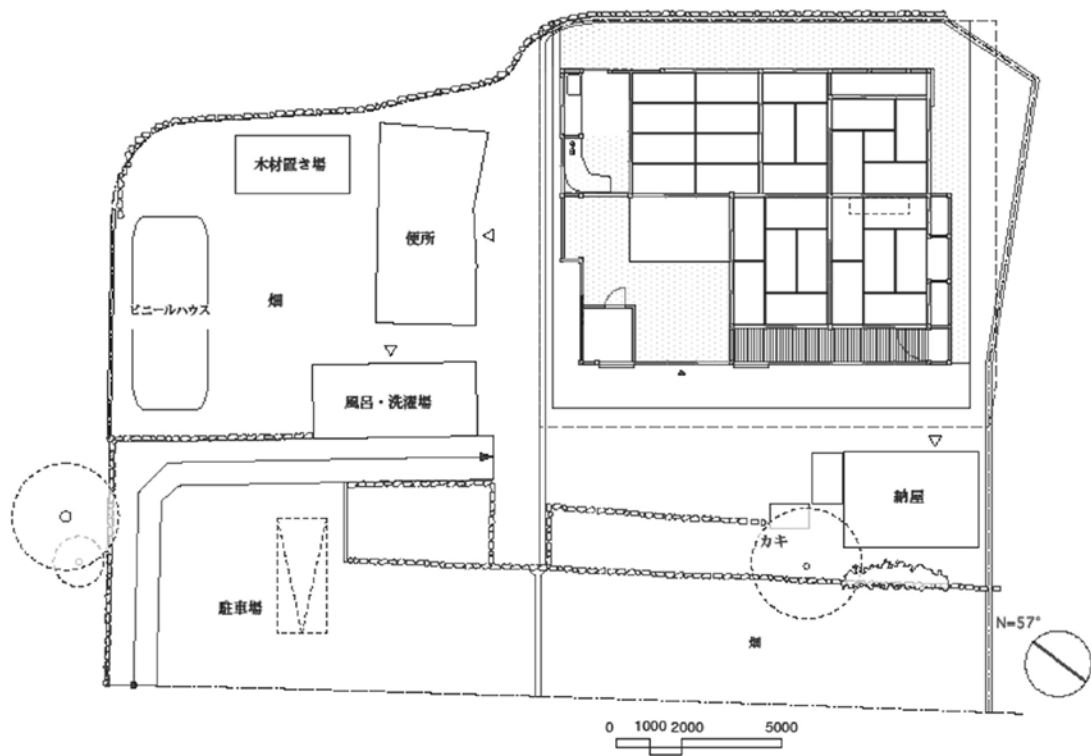
【荒木邸（西原集落）】 蘭島の南に位置し、背後に小高い山を背負い、川に面した西斜面に屋敷を構えている。谷に向かって降りて行く棚田を見降ろし、道を挟んで畑と駐車スペースをもちその背後の山側に主屋が建てられている。現在は拡張された自動車道を挟んでいるが、昔は細い小道であり、背後の樹林、屋敷、道、棚田、河川に降りて行く空間の連続性は、河岸段丘に営まれていた生産域と居住域の布置を典型的なカタチで残している。

間取りは笠松邸と同じくカミノマ、シモノマを前列にもち、後列にナンドをもつ。その横に連なる4畳と8畳の間は、かつては板床であったことが推測され、この地域特有の三間取の特徴に合致するが、確定はできていない。土間は実測した事例の中では最も広く、規模も大きなものとなっている。

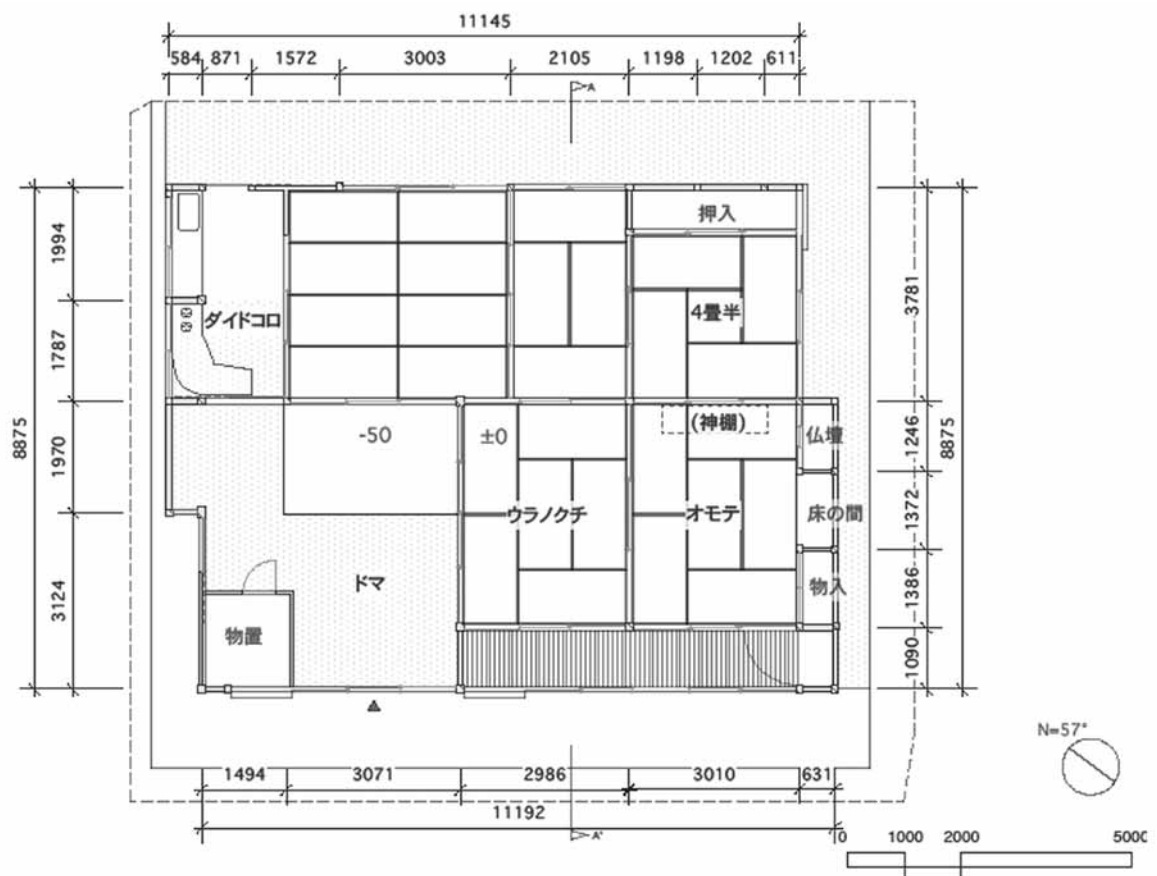


資料 5-3-1 荒木邸（西原集落）外観

昔は細い里道を挟み屋敷と棚田が連続的に繋がっていた土地利用の風景が残されている

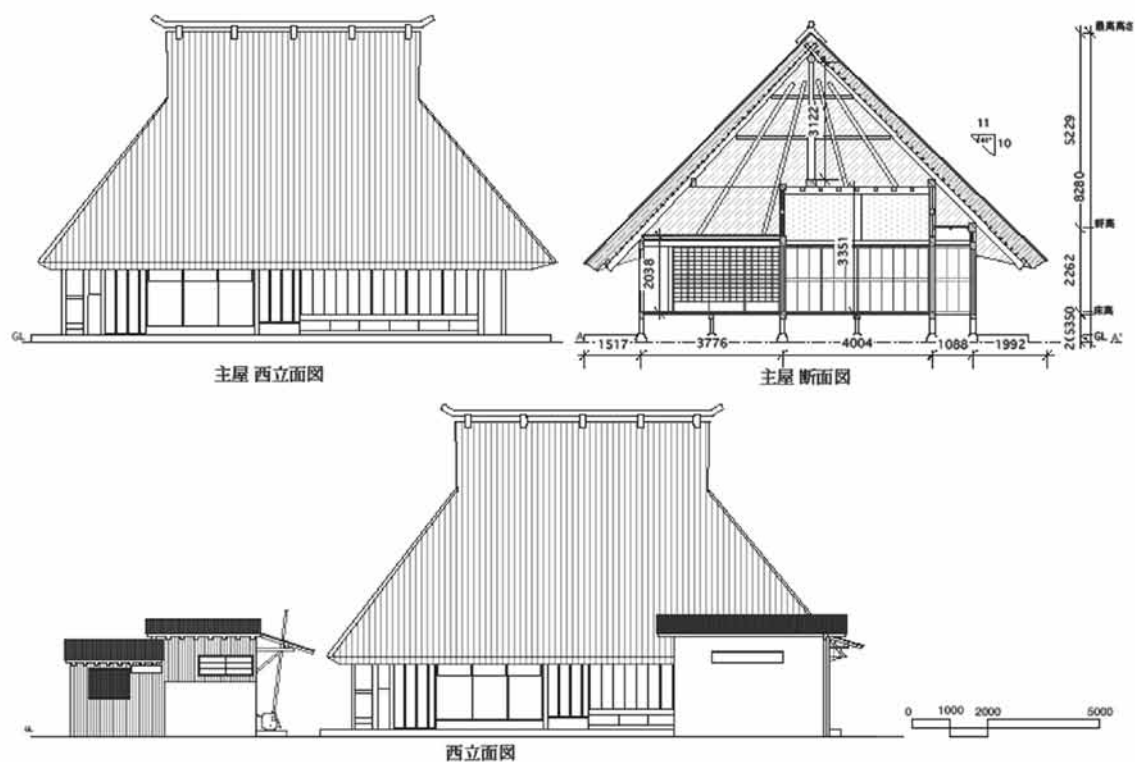


配置図



平面図

資料 5-3-2 荒木邸 (西原集落)



荒木邸立面図・断面図



資料 5-3-3 荒木邸（西原集落）外観

【堀江邸（清水集落）】和歌山県文化財学術調査報告書作成の第2次リスト調査表（昭和44年和歌山県教育委員会）によると、「山保田大庄屋、150年前（推定）」と記録されており、主屋の奥に並んで建てられたほぼ相似形に近いハナレの略図が記録されている。その所見メモには、「山保田の大庄屋当時の建築と思われる。住宅ではなく庄屋の事務所として使用していたものである。屋根はトタンで保護してある。」（調査日昭和42年6月23日）と記録されており、既に46年前から鉄板が被せられていたことがわかる。現在でもその保存状態は良く、旧街道沿いの交差点に位置しているため、今でも歴史的な特徴を残すランドマーク的な存在として、景観形成の重要な要素となり続けている。



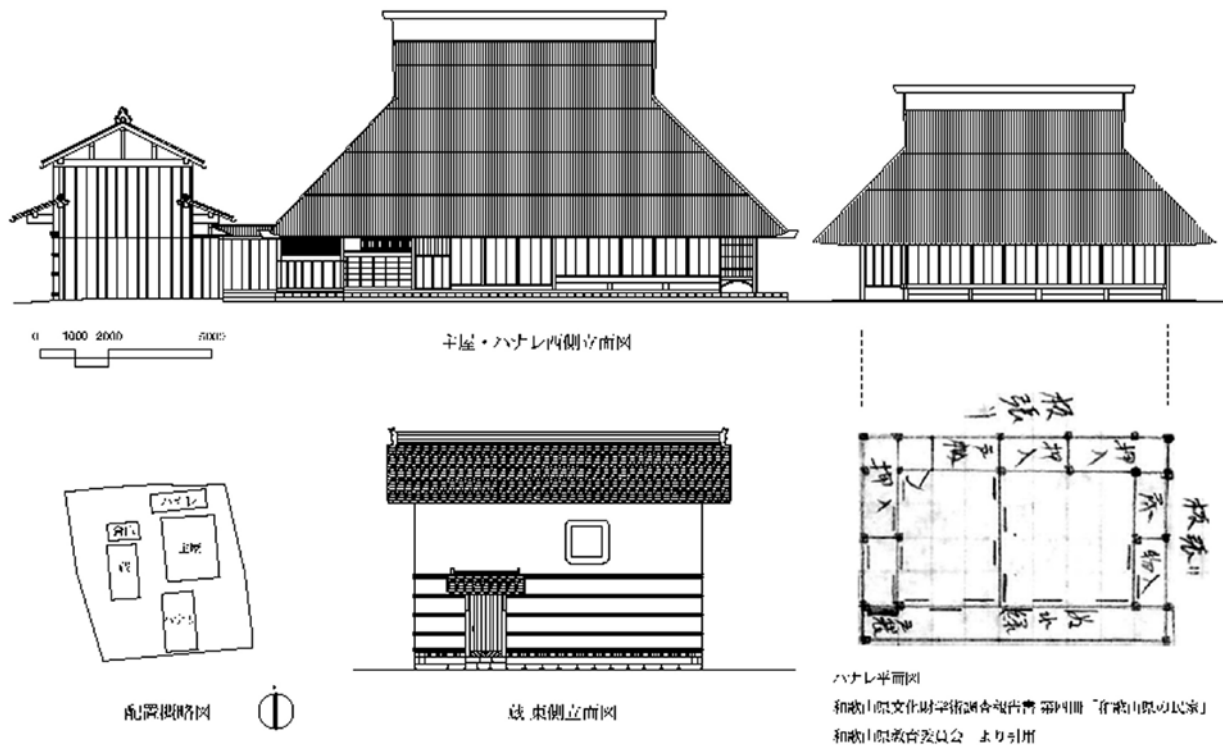
資料 5-4-1 堀江邸（清水集落）軒裏



土蔵



資料 5-4-1 堀江邸（清水集落）外観

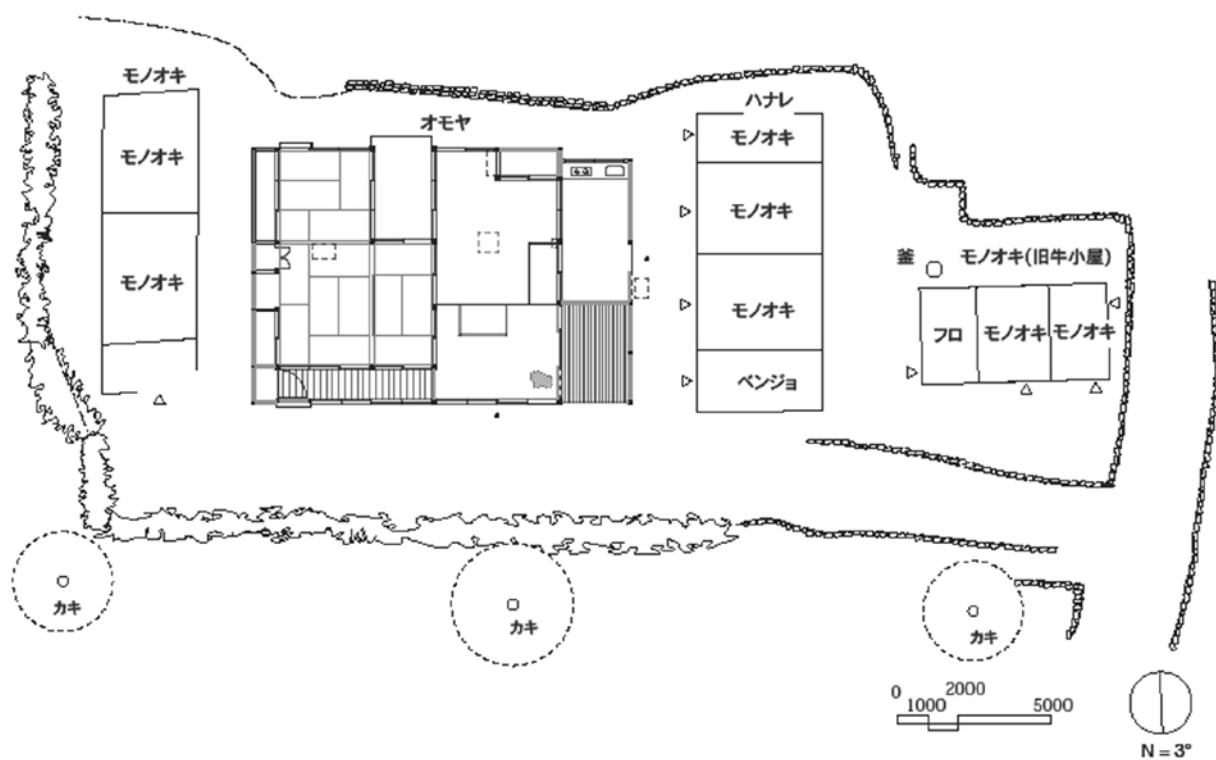


資料 5-4-2 堀江邸（清水集落）配置見取図・立面図・ハナレ平面図

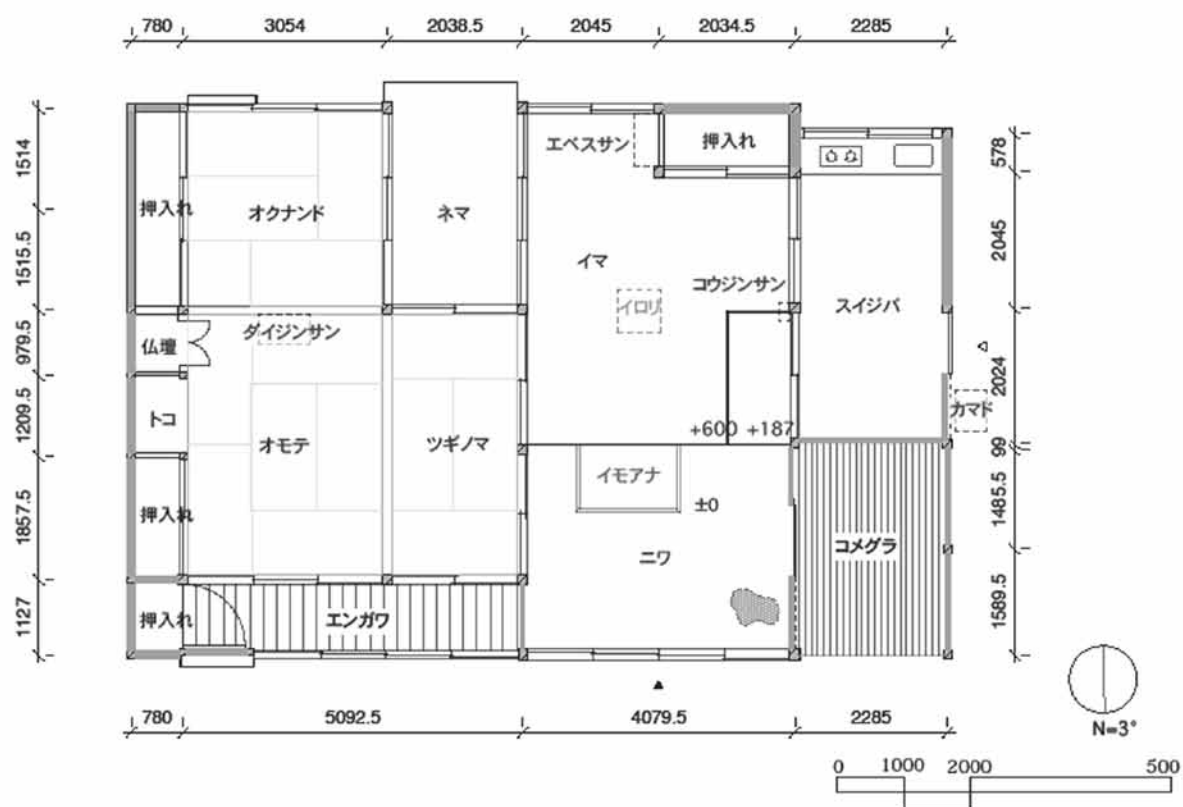
【杉谷邸（湯子川）】湯子川地区を代表する古民家で、良好な景観の形成に寄与している。敷地内には主屋の他旧牛小屋として使われていた小屋も残されており、天井が張られていないなど後世の改修が少ない建物である。主屋は推定 250 年の古さであるとも言われ、主屋のスイジバやハナレなどは昭和に入って建て直されている。昔は紙漉きも行っており、イドの水や坪井谷川の水利用など、生活用水の使い方を今に残している。



資料 5-5-1 杉谷邸（湯子川集落）



配置図



資料 5-5-2 杉谷邸（湯子川集落）

(4) 茅葺き屋根の構造

上述してきた地域の屋根の形を特徴付けているのは垂木構造であり、民家に限らず、三田の浄安寺、粟生の吉祥寺薬師堂、岩野河の法音寺などにも通底する造形要素として地域の集合的アイデンティティを支えている。勾配はほぼ矩勾配に近い。

これは上屋の軸組みに地棟を架け渡し、その上に棟束をたて、比較的断面の小さな棟木を定規として天秤のように垂木をかけ渡す構法であり、棟束は貫により結ばれている。

茅葺民家の構法もこの技術の延長線上にあると考えられ、地元大工や茅葺き職人の技術として定着していた構法であることがうかがわれる。

構造の特徴としては、家屋の本体をなす柱・梁の軸組みの上に、蓋をするように屋根が載せられ、接触面の滑動を許している。これにより雪などの外力による屋根の変形が軸組みに及ぼす影響を軽減し、結果的に壁の配置に自由度を与える小規模構築物向きの構法であったと言える。

笠松邸の場合この構法は小屋を支えている上屋の軸組みの柱割に拘束されることなく小屋組が組めるため、棟の中心と柱の位置を揃える必要が無く、自由な間取りが可能となっている。また中央部では外周部より高い位置に梁やサシモノをかけ渡すことにより、カミノマ、シモノマのような主室となる座敷の天井高は高く上げられている。

軒先は断面の大きい丸太が梁や胴差しを越えて跳ねだしてくるため深い軒を得ることが可能となり、軒裏には丸太の元口が露出され軒をダイナミックに支えている様子を見ることが出来る。



写真 5-28 吉祥寺薬師堂



写真 5-29 法音寺本堂



写真 5-30 吉祥寺 垂木構造の見える軒先



写真 5-31 吉祥寺の小屋裏

多くの場合この構成を原形として、ひさし下の屋外部分を内部に取り込んでいる事例が多く、狭小な居住用地への適応とそのバリエーションの混成として、集落景観が特徴付けられていると言える。

なおこの小屋裏からは棟束と貫の交差部に結束されていた藁の包みから、多数のお札が発見された。



写真 5-32 笠松邸（小峠集落）垂木構造の小屋組

【参考文献】

- 1 小椋崇弘「外観からみた紀南民家の地域性とその分布に関する研究」（2007 年）
- 2 桑原康宏『熊野の集落と地名 紀南地域の人文環境』 清文堂 1999 年（p6）
- 3 気象庁「平年値分布図（1971～2000 年の平年値）」
- 4 本多友常・平田隆行・宮川智子・林田大作「外観から見た紀南民家の地域性」（『紀伊半島から発信するべき地学の拠点形成プロジェクト 第一回報告書』和歌山大学 2008 年 p83～95）
- 5 吉村英智「沿岸部集落における防災を意識した集落手法の提案－和歌山県日高町阿尾集落をモデルケースとして－」（2008 年）
- 6 安藤邦廣・乾尚彦・山下浩一『住まいの伝統技術』建築資料研究社 1995 年
- 7 千森督子「紀州民家の防風雨装置及び屋敷構えの特性と変容」（『生活科学研究誌』vol.4 2005 年）
- 8 山本新平「太地式民家の建築的特色紀南沿岸集落群におけるその位置付け」（2006 年）
- 9 川辺町史編纂委員会『川辺町史第二巻通史編下』1991 年（p873～p879）
- 10 日本民俗建築学会『図説 民俗建築大事典』柏書房株式会社 2001 年
- 11 千森督子「紀北の茅葺農家にみられる「ねじやだて」について」（1990 年、民俗建築 第 97 号、p50～53）
- 12 かつらぎ町郷土誌編集委員会「かつらぎ町誌」（1968 年、和歌山県伊都郡かつらぎ町、p107）
- 13 林響子「民家の特色からみた高野山周辺集落の相互共通性に関する研究」（2005 年）
- 14 和歌山県土木部建築課、社団法人和歌山県建築士会「紀の国 建築文化」
- 15 坊垣和明『民家のしくみ 環境と共生する技術と知恵』学芸出版社 2008 年
- 16 米田藤博「紀伊半島における防雨民家の分布と景観」（『地理学報』第 13 号 1974 年）
- 17 和歌山県林業振興課『平成 16 年度森林・林業および山村の概況』2004 年
- 18 清水町企画振興課『清水町五十年のあゆみ』2005 年
- 19 清水町編集委員会『清水町誌上巻・下巻』1995 年
- 20 野上町編集委員会『野上町誌上巻・下巻』1985 年
- 21 和歌山県教育委員会「和歌山県の民家」（『和歌山県文化財学術調査報告書』第 4 書 1969 年）
- 22 中村将之「和歌山県における民家の地域性とその分布に関する研究－外観要素に着目して－」
- 23 藤井麻里花「有田川及び貴志川中、上流域における民家の変遷とその要因に関する研究」（2008 年）
- 24 中島真吾「蘭島周辺の民家景観とその分布」（2011 年）
- 25 千森督子「有田川流域の民家の間取り形式に関する一考察」